

学科・資格 社会学科・特任教授

申請者氏名 後藤 範章

研究課題		視覚/映像社会学とビジュアル・リサーチ・メソッドに関する研究 (18)
報告の概要	研究目的 および 研究概要	<p>近年、我が国でも Visual Sociology への関心が高まり、研究成果も蓄積されるようになってきた。しかしながら、Visual Sociology を「映像社会学」と表現する研究者と「視覚社会学」と表現する研究者との間には、大きな溝が横たわっている。大雑把に言えば、前者は映像／画像データ（ないしメディア）を用いた“方法としての「映像」社会学”が、後者は「見る／見える」営みや経験そのものをテーマ化する“対象としての「視覚」社会学”が、それぞれ含意されている。本研究は、両者の溝を埋め（私は「ビジュアル社会学」と呼称する）、我が国における「実質的な Visual Sociology 事始め」を宣言して、研究を継続し成果を積み上げるものである。</p> <p>2023 年度までの成果をリレーして、18 年目の研究として実施した。</p>
	研究の 結果	<p>私は、1994 年度より研究室で学生と共に“写真で語る：「東京」の社会学”と題するプロジェクトに取り組んでおり、その中から「集合的写真観察法」と呼ぶ新しいビジュアル調査法を開発し実践を積み重ねている。プロジェクトの成果に関しては、学内での展示発表やウェブでの公開の他に、学会発表・講演や論文なども既に多数発表している。こうした蓄積を土台にして、日本より 20 年程先に進んでいる欧米の Visual Sociology Movement の成果をレビューして吸収しつつ、当研究室のプロジェクトの成果をそうした研究史の中に位置づけて、共通性と特異性を明確にし、独自の「ビジュアル社会学」の構築を進めている。</p> <p>本年度は、上記プロジェクトによる成果を文理学部を会場として対面での発表会を例年通りに開催すると共に、日本大学社会学会の特別講演会での講演を行ったり、関連する報告書や論文を発表することもできた。</p>
	研究の 考察・ 反省	<p>ビジュアル社会学ないしビジュアル調査法に関する研究成果が着実に蓄積され、学部及び大学院での社会学及び社会調査教育の場面でも定着するようになると同時に、学会での認知度と評価が格段に上がっている。関連する出版物も多く見られるようになった。</p> <p>そうした中、本プロジェクトの成果を基にした下欄 1) の特別講演を行うことができたことは、格別な意味を有している。31 年間の取り組みを振り返り、集合的写真観察法やゼミナールの学生との協働（コラボレーション）に基づくビジュアル・ワークの学術的な意義に関して深く掘り下げることができた。</p>
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日／場所	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>1) 2025 年 1 月 16 日(水)、日本大学社会学会特別講演会で「東京と東京人のビジュアル社会学—ゼミ生との協働による 31 年間の研究プロジェクトの歩みと成果、あるいは“せめぎ合いと紡ぎ合いのダイナミズム”について—」と題する講演を行った。</p> <p>2) 2024 年 12 月 10 日(火)～14 日(土)、第 31 回“写真で語る：「東京」の社会学”展を文理学部図書館ホールで開催した。</p> <p>3) 2025 年 1 月 16 日(水)、第 12 回シモタカ・ジョースイ映像祭を文理学部図書館 3F のオーバルホールにて開催した。</p> <p>4) 2025 年 3 月、社会学科後藤研究室の Web サイトで 2) 及び 3) の全作品を公開した。</p> <p>5) 2025 年 3 月、『日本大学文理学部社会学科後藤範章研究室 2024 年度成果報告書（後藤ゼミブックレット 2024）』を刊行した。</p> <p>6) 後藤範章「大都市類型別の地域間移動パターンと通勤・通学流動」大谷信介編著『社会調査が変える 自治体政策の未来』ミネルヴァ書房、2025 年 2 月所収。</p>	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者		